

【論文】

葛西城と古河公方足利義氏

谷口 榮*

目次

はじめに

1. 葛西城の変遷

- (1) 葛西城をめぐる攻防
- (2) 空白の天文期
- (3) 城の改修

2. 城の格式と小田原との関係

- (1) 威信財の出土
- (2) 小田原との関係を示す品々
- (3) 葛西城と葛西新宿

3. 足利義氏と葛西城

- (1) 葛西御座と元服
- (2) 古河公方の移座と所領
- (3) 義氏移座後の葛西城

おわりに

キーワード 境目の城 水陸交通の要衝 古河公方 足利義氏 威信財
小田原系かわらけ 戦国城郭 城郭の多様性 博物館の連携

はじめに

葛西城の所在する東京都葛飾区は、東京都東部に位置し、武蔵野台地と下総台地の間に広がる東京低地と呼ばれる低地帯に立地している。東京低地は、関東平野の臨海部にあり、関東諸河川が東京湾に注ぐ河川の集中している地域でもある。東京低地は、河川を利用した南北方向の水上交通だけでなく、東西方向には陸上交通の幹線が貫く、水陸交通の交わる地域であり、葛西城はこの水陸交通とともに、巨視的に見ると河川によって関東の内陸と海とが結ばれる交通の要衝に位置していた。また東京低地は、武蔵と下総両国の境界地域でもあり、葛西城は境

*葛飾区郷土と天文の博物館



図1 東京低地地形分類図と葛西城の位置 (薄いトーン部分が微高地)

目の城という面も兼ね備えている。

初めて葛西城に学術的な調査が実施されたのは1972年である。環状七号線道路建設に伴う第1次調査によって、地下に中世城館が良好な状態を保って遺存していることが確認され、以後6次に亘る発掘調査が行われた。調査の結果、低地遺跡という環境もあって、台地上の遺跡では朽ちて残らない漆椀などの木製品をはじめ戦国期を中心とした多種多様な遺物が出土した。葛西城は、戦国の世の暮らしぶりを研究するうえでも貴重な遺跡として全国的にもその名が知られている。また学史的にみても、当時はようやく中世という比較的新しい時代の考古学調査が始動した時期でもあり、東国における中世考古学の先駆けの調査のひとつとしても知られている。

2007年は葛西城の発掘調査が行われてから35年目を迎えた。葛飾区郷土と天文の博物館では、葛西城発掘35年を記念し、また合わせて博物館考古学ボランティア活動15年という節目の年でもあり、その記念も兼ねてボランティアの協力を得ながら特別展「関東戦乱一戦国を駆け抜けた葛西城」(2007年10月21日～12月9日)を開催することになった。

開催にあたっては、展示の内容をより深く検討するために記念シンポジウムの開催を企画していたが、江戸東京博物館、埼玉県立嵐山史跡の博物館と当館の3館が連携して最新の戦国城館の研究成果をテーマに据えたシンポジウムを実施することになった。

また、当館を含め同時期に埼玉県川越市立博物館、埼玉県行田市立博物館、埼玉県寄居町鉢形城歴史館、埼玉県立嵐山史跡の博物館で小田原北条氏に関連する展示会を開催する予定で準備を進めていた。そこで事前に各館で借用遺物の重複を避けるための調整を図るなど展示内容の情報の交換などを行っていたが、5館が連携して協力し合い関東の戦国を多くの方に知っていただける機会を設けてはどうかということになり、共通テーマ「関東の戦国を知る」と題して5館連続展示を企画するに至った。

葛西城の調査研究は、発掘調査だけでなく、文献史料の調査研究がうまくかみ合ってきたことによって、大きく進展してきたといっても過言ではなからう。特に近年注目されるのは古河公方足利義氏と葛西城との関係である。ここでは、特別展で明らかとなった葛西城の姿と、2007年12月1・2日と2日に亘って葛飾区郷土と天文の博物館で開催されたシンポジウム「葛西城と古河公方足利義氏」の成果を基に、今まで知られていなかった小田原北条氏時代の葛西城の様相の一端を紹介してみたいと思う。

1. 葛西城の変遷

(1) 葛西城をめぐる攻防

葛西築城と大石石見守

葛西城は、享徳3年（1454）の享徳の大乱前後に山内上杉方の葛西地域の軍事的な拠点として青戸の地に築城されたものと考えられる。葛西城には、武蔵守護代大石氏の一族大石石見守が在城し、山内上杉方の関東最南端の前線、海を望む葛西の守備にあっていた。

小田原に本拠を構える北条氏綱は、関東に勢力を張っていた上杉氏の内紛に乘じ、関東進出を企て、大永4年（1524）に江戸城を攻略した。翌大永5年（1525）には葛西に迫った。その時の緊迫した様子は、扇谷上杉氏の家臣三戸義宣が越後の長尾為景に宛てた書状からも知ることができる（「三戸義宣書状」上杉家文書）。この書状で義宣は、大石石見守が守備している葛西城へ、敵が向かっている旨を伝え、もし葛西城が落ちれば「当国滅亡」と為景に援軍を求めている。葛西城及び葛西の地が、上杉氏の領国経営のためにどれだけ重要な位置にあったかがうかがえよう。葛西城は、後詰めもあってこの攻勢を何とか退けることができた。

小田原北条氏の進攻

小田原北条氏の攻勢はなおも続き、天文6年（1537）に扇谷上杉氏の本拠河越城が落とされると、葛西城も翌天文7年（1538）2月2日について北条氏綱に攻略されてしまう。同年10月には、小田原北条氏は下総西部へ侵攻してきた小弓御所足利義明と里見義堯の軍勢と国府台において合戦となった。これが第1次国府台合戦であり、葛西地域はこの合戦に勝利した北条氏の勢力下に入ることになる。

永禄3年（1560）、長尾景虎（後の上杉謙信）が関東に出陣し、反北条勢力を結集して小田原北条氏の本拠地である小田原城下まで軍を進駐させた。これによって葛西城も反北条勢力の手に落ちてしまうが、上杉勢の関東退去後の永禄5年（1562）に小田原北条氏は葛西城を再奪取する。

その後、永禄7年（1564）に北条氏康と里見義弘は再び国府台で合戦となり（第2次国府台合戦）、葛西地域は勝利した小田原北条氏の領国として天正18年（1590）まで維持されていく。

小田原攻めと葛西

天正18年（1590）、20万を越える秀吉軍が小田原北条氏を攻めるために進撃を開始した。小田原城が秀吉の大軍に包囲されているなか、小田原北条氏方の関東の諸城では、次々に攻め落とされ、あるいは開城させられてしまう。同年4月22日、南関東の要のひとつ江戸城が開城降伏するが、葛西城だけはなぜか孤軍奮闘していた。徳川家康の家臣戸田忠次の家伝によると（「戸田忠次家伝」寛永諸家系図伝）、江戸城をはじめ周辺の小田原北条方の城が開城降伏するなかで葛西城のみが降伏しなかったため、忠次が攻め落としたと記されている。葛西落城の正確な月日は不明であるが、「浅野長吉書状」（葛西神社文書）から4月29日前後と考えられる¹⁾。

(2) 空白の天文期

20年余りの空白

大石石見守が守備する葛西城は、天文7年（1538）に北条氏綱によって攻略され、小田原北条氏の下総進出の足場となる最前線の城となった。さらに同年の第1次国府台合戦によって、葛西地域は合戦に勝利した小田原北条氏の勢力下に組み込まれるのであるが、その後、永禄2年（1559）に「小田原衆所領役帳」が作成されるまでの約20年間の葛西城や葛西地域については不明な点が多く、歴史的にも空白期であった。

天文7年以降の天文期については、文献史料もあまりなく、永禄期以降に文献史料も豊富になることから、見過ごされていた時期と言った方が良いのかもしれない。

考古学的には、15世紀後半から16世紀代の遺物や遺構が確認されていることから、空白期というわけではなかった。ただ時期の問題というよりも、出土している遺物のなかに、どうしてこのような品物が葛西城から出土するのだろうかという疑問が考古学側からはあった。

例えば、葛西城は環状七号線道路建設に伴う調査が行われた後も、「葛西城の規模は通常城郭とよばれているものと違い、おそらく「砦」あるいは「館」程度の小規模のものであったに違いない。」とか、「青戸に城塞がつくられたのは、小田原北条氏の時代になってからのことで、天文・永禄両度に起きた房総里見氏との国府台合戦に備えて急ぎよ築造されたとみるのが妥当のようである。」²⁾と記した本があるなど、葛西城を戦のためだけに造られた小規模な施設としてイメージされていたのである。

しかし、葛西城から出土した中国元代の青花器台は、古泉弘氏³⁾や小野正敏氏⁴⁾によって注目されたように威信財と呼ばれる希少性の高い優品であった。なぜ葛西城からそのような優品が出土するのか。従来の葛西城のイメージとはかけ離れた存在であったからである。

また、小田原で作られたいわゆる小田原系の手づくねかわらけなども考古学的に注目すべき遺物であった。小田原系かわらけは、小田原北条氏の支城などで天正期以降に多く出土するが⁵⁾、葛西城は天正期以前のものが出土していることである。舶載の青花器台や小田原系かわらけの出土は、何かおかしいぞという雰囲気を感じさせながらも、その背景なり、意義なりについてはわからずじまいであった。

葛西ヶ谷か葛西か

葛西城に関する考古学的な成果を整理するためもあって、文献を研究されている方に永禄2年の「小田原衆所領役帳」に「葛西様」とあるが、葛西城や葛西地域とは関係ないのだろうかという質問をしたことがあった。「葛西様」は古河公方足利義氏のことで、鎌倉の葛西ヶ谷（神奈川県鎌倉市）に御座していたからそうのように呼ばれたもので、葛西城や葛西地域とは残念ながら関係がないとのことであった。それが20世紀までの「葛西様」に対する一般的な理解であった。

しかし、2002年に佐藤博信氏が「古河公方足利義氏論ノート」⁶⁾を著し、古河公方足利義氏が

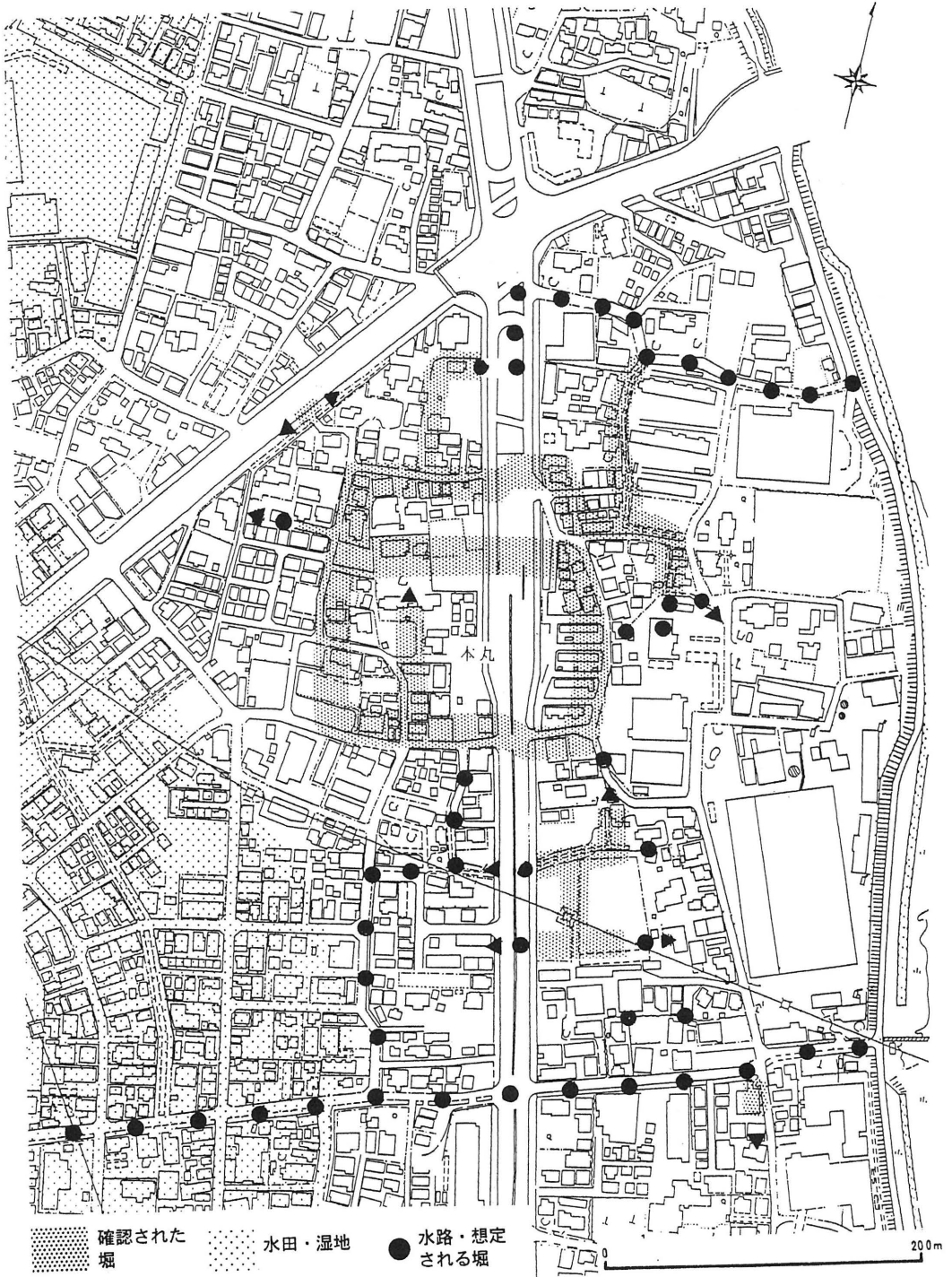


図2 葛西城縄張り想定図

葛西城に御座していたと指摘したのである。佐藤氏はそれまで、鎌倉の葛西ヶ谷説をとっていたが、史料の丹念な再吟味を行い、義氏の葛西城御座を解き明かしたのである。佐藤氏の研究によって古河公方足利義氏が少なくとも天文21年頃（1552）から永禄元（1558）年頃まで葛西城に御座していたことが明らかとなったのである（佐藤 2002）。それも義氏の父足利晴氏とその妻芳春院（北条氏綱の娘、氏康の妹）の3人で一緒に葛西城に御座していたのである。

葛西城が古河公方の御座所であったことが確認されたことにより、小田原北条氏にとっても単なる最前線の砦ではないことが判明し、船載の青花器台や小田原系かわらけについても、古河公方や小田原北条氏との関係のなかで語ることが可能となったのである。

(3) 城の改修

大石石見守から小田原北条氏へ

小田原北条氏時代の本丸からは、幅約20メートルの大規模な堀に切られる幅4～6メートル程の古い堀が確認されている。切り合い関係やそこから出土した遺物から、この小さな堀は上杉氏時代のもと考えられる。上杉氏時代の葛西城の縄張りは、小田原北条氏の改修もあって明確に捉えることはできないが、中核部は、古い堀などの遺存状況から小田原北条氏時代の本丸付近にあったものと想定される。

そして小田原北条氏は、本丸の堀の例にみられるように上杉氏時代の葛西城の縄張りを刷新して、戦国の城としての構えを整えたのである。葛西城は、天文7年（1538）の小田原北条氏の入部とともに、大規模な縄張りの変更があったと見るべきなのであろうか。

その可能性は否定できないが、従来は小田原北条氏が天文7年に上杉氏の大石石見守から葛西城を奪取してから、永禄3年（1560）に敵方に奪われるまでは、葛西城は上杉氏時代の城に大きく手を加えることは行わなかったのではないかと考えられてきた⁷⁾。

大規模な改修の契機は、永禄5年（1562）4月24日に小田原北条氏が葛西城を再び手中した後と判断したのである⁸⁾。敵に落とされた葛西城の縄張りを刷新し、さらに対岸に交通と開発の拠点として葛西新宿を築くなど城下の整備も行ったものと判断し、堀幅の大幅な拡張も鉄砲への配慮と考えていた。

しかし今回葛西城の特別展を開催するにあたり、過去の調査で発見された葛西城の遺構・遺物を再度見直したところ、その考えを訂正すべきであることがわかった。従来、Ⅱ区E号やⅣ区堀⁹⁾など大規模な本丸の堀の構築時期を永禄5年以降としていたが、後でも触れるが第80・81号井戸¹⁰⁾の時期が永禄5年以前に求められることが判明したためである。少なくとも天文7年以降から永禄の初め頃までに、第80・81号井戸とⅡ区E号やⅣ区堀などの小田原北条氏時代の本丸を区画する堀が掘られる大改修がおこなわれた可能が考えられるのである。つまり結果として、古河公方足利晴氏・義氏が御座していた時期に相当することになる。

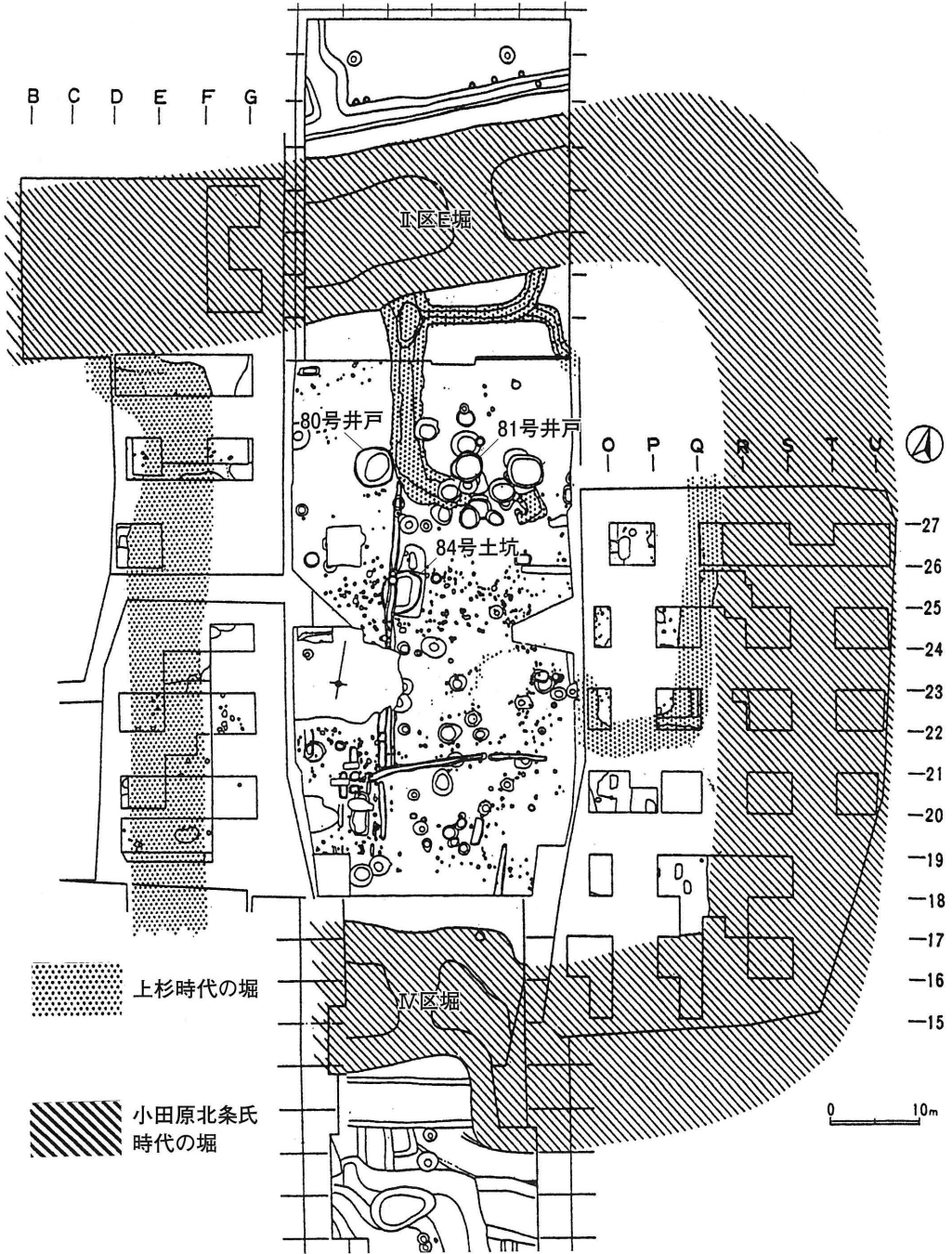


図3 III区本丸付近の遺構配置図



II区B堀 上杉氏時代

II区E堀 小田原北条氏時代

戦国の城郭へ

小田原北条氏によって、大石見守の葛西城に手が加えられ、戦国の城郭としての姿を整えていくのであるが、大改修の契機のひとつには、先に述べたように、古河公方足利晴氏・義氏親子の御座所としての体裁を整える普請が考えられる。

黒田基樹氏は特別展の図録のなかで、天文19年（1550）「閏五月十九日 結城政勝書状写」（結城家譜草案）の検討から、早ければ天文19年頃に足利晴氏とその正室芳春院殿、そして梅千代王丸（元服前の義氏）の葛西御座の可能性を述べられている¹²⁾。その指摘からすると、天文19年から永禄元年（1558）の義氏の葛西退去までの時期に、II区E号やIV区堀と呼ばれる本丸を画する堀が構えられるなどの縄張りの刷新が行われたと考えられるのである¹³⁾。

本丸をめぐる堀の大幅な拡張について、その時期を訂正前の永禄5年以降と考えた時点でも、鉄砲への配慮と考えていたが、天文19年から永禄元年としても、鉄砲との関わりを想定できようか。一般的には、鉄砲が普及するのは永禄期とされているが、最近の研究では関東には天文20年頃にはすでに鉄砲が持ち込まれていたともいわれている¹⁴⁾。古河公方の御座とも重なる時期であり、大改修の時期について訂正をおこなったが、大きな堀の構築には、戦の変化、つまり鉄砲との関わりを考慮しておきたいと思う¹⁵⁾。

葛西城は、天文19年から永禄元年に大石見守の城の縄張りを刷新して戦国城郭へと整備されたが、義氏退去後は何ら手を加えることは行われなかったのだろうか。葛西城をめぐる攻防をみると、永禄3年（1560）に長尾景虎による関東進攻によって反小田原北条氏方に一旦奪われ、永禄5年（1562）に再び小田原北条氏が葛西城を奪取しており、この時に、敵に落とされた葛西城に手を加えるために縄張りを改める普請が行われたとも考えられる。いずれにしても、戦国の城郭としての役割を終える天正18年の落城に至るまで幾度となく手が加えられたのではないだろうか。

2. 城の格式と小田原との関係

(1) 威信財の出土

結桶の備わった石組の井戸

葛西城から発掘された多くの井戸の中で、Ⅲ区本丸から発掘された第80・81号の2基の井戸は、石組と結桶の井戸側を備える特徴的な構造を備えたものである。葛西地域は、デルタ地帯なので石材資源が乏しく、石組の井戸を造るのは大変な労力を必要としたであろう。石塔類が石組に転用されているのも、その辺りの事情を物語っているように。

この2基の井戸は石組とともに井戸側に結桶を用いる点でも注目されるのである。関東ようやく結桶が普及し始めるのは16世紀になってからであり。当時としては最先端の技術で造られた井戸としてとらえることができる。南関東において、この2基の井戸は結桶の古手の出土事例として特筆¹⁶⁾されるものである。

第81号井戸からは、蒲鉾の台や折敷が小田原系の手づくねかわらけがまとまって出土しており（実測可能固体11点）、饗宴が催され、宴席で使われたものが廃棄されたものと判断される。第80・81号井戸とも天文7年以降に掘られた井戸で、第81号井戸は出土した小田原系の手づくねかわらけから天文末に位置づけられ、足利義氏在城期の資料として注目される。

威信財を出土した土坑

葛西城からはステイタスシンボルと呼ばれる威信財が出土している点でも注目される¹⁷⁾。本丸の第84号土坑は、本丸に穿たれた戦後処理の廃棄穴で、そこから出土した中国元代の青花器台は、全国的にも類例の少ない優品である¹⁸⁾。もともと元様式の青花（染付）は、日本での出土は希少で、富や地位の象徴という意味合いを持つとされている。

同じ第84号土坑から出土した茶臼も、中国の茶臼を模倣した優品である¹⁹⁾。また、常滑の甕も鎌倉末頃のものや伝世した骨董品と見られる。これらの優品は、おそらくは本丸に築かれた御主殿の会所に飾られていたものであろうか。大量の炭化した穀類と併に出土していることから、御主殿の納戸に納められていた可能性もある。



第80号井戸



第81号井戸



第84号土坑出土 青花器台



第84号土坑出土 茶白

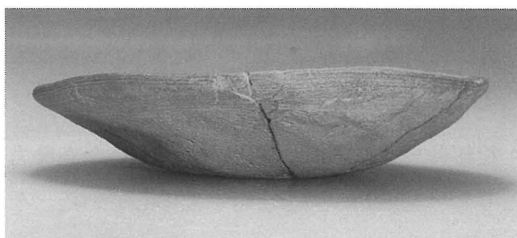
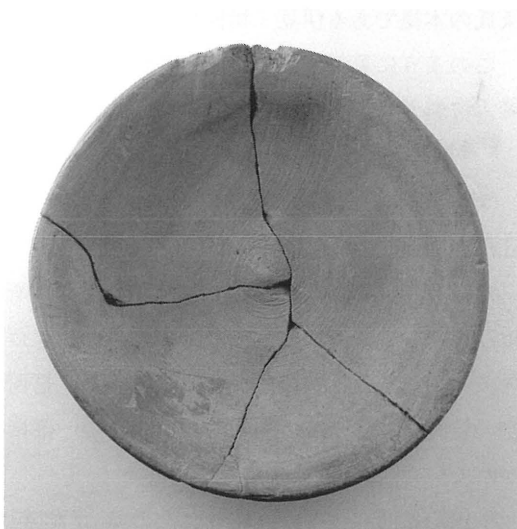
本来は青花器台には本体となる壺が飾られていたはずであるが、第84号土坑からはそれらしき破片は見つかっていない。何らかの出来事によって、威信財などの優品の一部は破損し、大量の炭化物とともに穴の中に棄てられたのであろう。穴が穿たれた時期は、永禄5年の小田原北条氏再奪取頃かそれ以前のものと推定される。

第84号土坑から出土した優品は、それを保有できる人物が葛西城に居たということ を裏づけている。また、最新の技術で造られた井戸なども含め、城の格式を物語るものであろう。これらの優品や新技術が現段階では直接古河公方足利義氏と結び付くわけではないが、義氏の御座が史料上だけでなく、考古学的にも十分な内容を有していることを強調しておきたいと思う。

(2) 小田原との関係を物語る品々

小田原系のかわらけ

先の第81号井戸から出土した手づくねかわらけは小田原系と呼ばれる北条氏の本拠小田原から搬入されたもので、小田原で分類されたⅡa期新段階とされた天文末から元亀期²⁰⁾の間に作られたものと同類である。本資料は、底部から体部への移行がなだらかでなく、Ⅱa中段階に近い様相を持っていることから、Ⅱa期新段階でも古手の一



第81号井戸出土 小田原系手づくねかわらけ
上) 内面 下) 側面

群としてとらえることができよう。時期的には、天文末から永禄の初め頃に位置付けておきたい。²¹⁾ 南関東においては、小田原系の手づくねかわらけが小田原以外で出土するのは、天正期に入ってからが一般的である。葛西城は比較的古い出土事例として注目される。おそらく本資料が葛西城にもたらされる契機は、足利晴氏・義氏との関わりが考えられる。



ヒコサンヒメシャラ (神奈川県立箱根湿生園提供)

漆器とヒコサンヒメシャラ

かわらけ以外に、漆器に描かれた鶴や亀などの絵柄のなかには小田原城出土のものと同様のものであり、塗り師などの職人が小田原と葛西間を行き来したものか、あるいは製品が流通していたとことが考えられる。

このほか葛西城の堀からは白い花を付ける観賞用のヒコサンヒメシャラの種子が出土している。この花は箱根など小田原以西にしか自生しないことから、葛西城に入った武将が小田原北条氏の本拠である伊豆・相模から運んで植えて愛でたものと考えられている。²²⁾

このように葛西城が小田原北条氏方の城であったということを、文献だけでなく遺物などの考古資料からも裏付けることができるのである。²³⁾

(3) 葛西城と葛西新宿

江戸と葛西

永禄2年(1559)に作成された「小田原衆所領役帳」によると、葛西地域の所領のほとんどは江戸衆の筆頭である遠山丹波守をはじめ江戸衆が押さえ、葛西地域の要である葛西城も遠山丹波守の一族遠山弥九郎が在城していた。葛西地域は、大きく見ると江戸城を本拠とする江戸衆の管轄下であって、地域的には江戸の一部に組み込まれ、なおかつ遠山氏の強い影響下に置かれていた。²⁴⁾

小田原衆所領役帳が作成されたのは、足利義氏が葛西城を去った翌年の永禄2年であるので、義氏在城期における葛西地域の所領支配の状況がどのようなものであったのかは役帳から読み取ることは難しい。しかし、葛西城を御座所とした義氏を江戸衆及び遠山氏が後ろ盾となっていたことは容易に想像できよう。

役帳作成後の葛西地域は、一時、反北条勢力に制圧された時期を除いて、基本的に江戸衆、とりわけ遠山氏が大きな力を及ぼしていた。そのことは早稲田大学図書館が所蔵する遠山文書に船橋や葛西堤に関して、遠山氏に関わることからもうかがうことができる。

ただし、いつも遠山氏一族が葛西城に在城していたわけではなく、永禄12年(1569)と推定

される穴八幡神社所蔵文書によると、葛西地域に本拠を持つ江戸衆の会田・窪寺両氏が葛西城に在城していたとされる²⁵⁾。いずれにしても葛西城及び葛西地域は、小田原北条氏時代には遠山氏を筆頭とする江戸衆の支配下にあり、江戸地域の一部として維持されていたのである。

葛西新宿の整備

小田原北条氏は、葛西城の改修とともに、対岸の葛西川（中川）東岸に新しい宿場「葛西新宿」の整備を行い、城下の開発を進めている。永禄11年（1568）に葛西新宿の伝馬役を定めた記録が葛西新宿の初見文書で、その頃には葛西新宿がすでに整備されていることがわかる。²⁶⁾

天正10年（1582）の伝馬手形には、江戸から浅草、葛西新宿、白井までの交通が記されており、小田原から江戸を経由して下総の内陸部へと結ぶ小田原北条氏の交通網の拠点のひとつとして葛西新宿が機能していたことがわかる。²⁷⁾

葛西城は、天正期にはもはや御座所でもなく、最前線基地でもなくなっていた。すでに江戸城を本拠とする江戸地域に組み込まれていたが、江戸領域の軍事的役割は江戸城が担い、葛西城の軍事的役割は中継・補給基地化し、以前に比べて低下した。しかし、葛西地域の政治・経済的な役割が低下したわけではなかった。²⁸⁾

葛西地域は、関宿などの上流部や佐倉や白井などの下総内陸地域への玄関口として変わらず重要な位置を占めていた。天正期の葛西に関する史料には、天正4年9月23日の「北条氏照判物写」²⁹⁾では佐倉・関宿、葛西・栗橋の船の交通を認め、一連の遠山文書には、堤の修復や舟橋³⁰⁾の維持を命じるものが残されている。葛西城が中継・補給基地となるなかで、葛西の交通など領国に関する史料が目立ってくる。その拠点となるのは、葛西城ではなく、葛西新宿であった。葛西城の役割が変容するとともに、南北に河川、東西に街道を交える交通の要衝葛西新宿の役割が高まったのであろう。³¹⁾

4. 足利義氏と葛西城

(1) 葛西御座と元服

足利晴氏と小田原北条氏

小田原北条氏は、武蔵・下総進出にあたり、武力のみに拠らず、東国の政治権力の象徴である古河公方との接近を図った。天文7年（1538）第1次国府台合戦で小田原北条氏が勝利し、足利義明が討死して小弓公方が滅亡すると、北条氏綱は古河公方足利晴氏と娘芳春院殿との婚姻を迫り、翌天文8年に婚儀が執り行われた。天文12年（1543）には、晴氏と芳春院殿との間に梅千代王丸が誕生する。

しかし、晴氏には、すでに重臣築田高助の娘と婚姻して、藤氏と藤政の二子をもうけたいたのである。本来ならば長子の藤氏が公方に就任する立場にあった。

古河公方権力の回復を目論む晴氏は、天文15年（1546）関東管領上杉憲政の河越城攻めに与

して小田原北条氏と敵対する。しかし河越合戦は小田原北条氏が勝利し、晴氏の政治的立場はかえって弱まることになってしまった。

天文19年か20年頃には、足利晴氏と妻芳春院殿、梅千代王丸の親子の葛西城移座が計画され、³²⁾少なくとも天文21年(1552)には葛西城へ御座している。この移座には公方側と小田原北条氏との折衝の産物と思われ、小田原北条氏の意向が強く反映されているものであろう。天文21年、足利晴氏は藤氏ではなく、梅千代王丸への家督移譲と自らの隠居を小田原北条氏によって強いられてしまう。しかし、晴氏は葛西城を脱出して古河城へ立て籠もり、天文23年(1554)小田原北条氏に対して敵対行動に出る。この抵抗もすぐに鎮圧され、晴氏は幽閉されて政治生命を断たれてしまうことになる。

古河公方足利義氏の誕生

天文の騒動も落ちつき、小田原北条氏にとって晴氏勢力の憂いのなくなった弘治元年(1555)、梅千代王丸の元服の儀式が葛西城で執り行われた。元服の様子は「義氏様御元服之次第」³³⁾として、その様子が記録されている。

梅千代王丸は、将軍足利義輝からその偏諱「義」の字を賜与されて「義氏」と名乗ることとなった。³⁴⁾北条氏康は、この元服の儀式に臨席して小田原北条氏の血を受け継ぐ公方の誕生を祝ったのである。義氏13歳の時である。義氏は、永禄元年(1558)4月頃まで葛西に在城し、10日に鎌倉の鶴岡八幡宮へ参詣を行い、³⁵⁾4月15日に北条氏の本拠小田原城へ入っている。その後は、葛西城に戻ることはなく、関宿城へ移っている。

(2) 古河公方の移座と所領

本拠と移座

古河公方は、足利成氏・政氏・高基・晴氏・義氏の五代にわたって下総の古河城を本拠とし、関東の将軍とも呼ばれ、東国における権威の象徴としての戦国の世に君臨した。

本拠の古河城周辺は、鎌倉公方時代からの直轄地が多く分布し、公方の重臣である築田氏が関宿城、野田氏が栗橋城をそれぞれ固め、公方の拠る古河城を支えていた。また、古河は下総・武蔵・下野の国境地域にあり、上野や常陸とも近接しており、加えて水陸交通の利便も良い交通の要衝でもあった。³⁶⁾

足利義氏は永禄元年(1558)4月に葛西城を発って、鎌倉鶴岡八幡宮社参を行い、その後、北条氏の本拠小田原へ向った。同年8月には関宿城に御座したとされる。義氏の葛西在城中は「葛西様」と呼ばれているが、関宿移座後は「関宿様」と見られることから、御座所の地名を冠して「〇〇様」と呼ばれるようになる。

関宿城は、一国にも相当すると例えられるような要地であった。この義氏の関宿移座は、北条氏康と築田氏との協議によって、本来築田氏の居城であった関宿城を義氏御座所として関宿を進上し、築田氏は古河城に移ることになったもので、政治的な駆け引きによるものであった。

永禄3年(1560)には、長尾景虎の関東進攻に呼応した古河城の築田氏が、義氏の兄藤氏を古河に入部させて公方として擁立するという事件があり、義氏は関宿から小金(千葉県松戸市)へ移座している。その後、佐貫(千葉県富津市)、鎌倉を経て、本拠の古河や栗橋へ移座した。³⁷⁾

古河公方足利義氏は、天正10年(1582)閏12月20日(関東の暦による)に古河城にて死去、享年40歳(法名は香雲院殿長山周善)であった。古河で生まれ、本拠を古河城としながらも小田原北条氏に庇護されながら政治情勢によって下総・上総・武蔵・相模の地を移座した古河公方足利義氏は、戦国の世に翻弄された最後の関東の将軍であった。

古河公方領と葛西

古河公方は、古河城を本拠に下総西部、下野南西部や武蔵東部に広がる下総下河辺庄・同幸島郡、下野小山領、武蔵太田庄・同崎西郡一带を中心に領国を形成していた。永禄2年(1559)の「小田原衆所領役帳」³⁸⁾によると、義氏の所領は他の上記以外の武蔵や相模地域にも分布しており、「品川南北」と武蔵の品川湊にも権益を持っていた。

佐藤博信氏によると、上杉禅秀の乱後、品川を鎌倉公方足利持氏が鎌倉府御料所とするなど、江戸湾内外の権益を鎌倉府が掌握する動きが確認され、足利成氏段階になると再編成が行われ、さらに足利義氏段階には「葛西様御領」が成立するという。³⁹⁾

すでに市村高男氏によっても、品川と古河公方家臣築田氏や東国の内海水運との関わりなどが指摘され、⁴⁰⁾ また佐藤博信氏によっても古河と東京湾を挟んで上総・武蔵湾岸の関係が指摘されてきた。⁴¹⁾ 今回の葛飾のシンポジウムにおいて、長塚孝氏は上総国西部に展開する古河公方領の存在に注目して、葛西城および葛西地域が本拠のある古河地域と上総地域の二つの古河公方領を結びつける扇の要に相当すると指摘した。この指摘により古河公方と古利根川・太日川水系および江戸湾交通の存在がより一層鮮明になったといえよう。

筆者は東京低地が交通上、水陸交通の結節点であるとともに、関東の内陸部と海とを繋ぐ位置にあり、考古学的な成果も踏まえ、東京低地への歴史学的な関心を喚起するために、東京低地を「関東の玄関口」と捉えて、その重要性を提起してきた。⁴²⁾ また、長塚孝氏⁴³⁾や湯浅治久氏⁴⁴⁾によっても東京低地の重要性が強調され、近年では先に紹介した市村高男氏⁴⁵⁾や佐藤博信氏⁴⁶⁾などの論考でも指摘されてきている。

古河公方領と葛西城や葛西地域との関係も、まさに東京低地が古代から連綿と続く海と内陸とをつなぐ要という地政のなかで理解することが可能であり、古河公方の領国の維持のためには葛西は重要な要衝としてみなされていたのである。

また、古河は旧葛飾郡最北部に位置し、古利根川・太日川水系を掌握する要地でもある。古河公方は旧葛飾郡という領域を基盤とした河川などに関わる権益を管轄しうる立場にあり、⁴⁷⁾ 古河の玄関口となるのがまさに葛西地域なのである。

(3) 義氏移座後の葛西城

前線基地から兵站基地へ

足利義氏が去った後、葛西城は永禄3年に上杉謙信の南下に伴って一端は落城するものの、永禄5年(1562)には小田原北条氏が再奪取を果たす。小田原北条氏は、葛西地域を再び勢力下におさめて天正18年(1590)まで領国とするが、軍事的脅威が無くなったわけではなかった。葛西城を取り巻く情勢は依然厳しく、反北条勢力の武蔵の岩付太田氏と房総の里見氏に挟まれ、不安定な状況であった。永禄7年(1564)、第2次国府台合戦に小田原北条氏が里見氏に勝利し、岩付太田氏も従属するに至り、安定したかのように思われたが、永禄11年(1568)以降、里見氏が市川付近まで何度も進攻するなど、引き続き里見氏の脅威に晒されていた。

葛西城が最前線基地の役割を終え、葛西地域が外憂に悩まされなくなり、軍事的な圧力から開放されるのは天正期に入ってからである。天正2年(1574)、小田原北条氏によって関宿城が攻略され、築田氏が関宿城を退去したことにより、葛西地域の上流部が完全に小田原北条氏によって掌握された。また天正期に入ると里見氏も下総西部へ進攻することもなくなった。葛西城は、天正期になると前線基地から中継・補給基地へと変容する⁴⁸⁾。

天正期以降の遺物

考古資料的に葛西城が特に小田原と強い結びつきを見せるのは、先に述べたように小田原系手づくねかわらけの年代から天文末から永禄の初めの頃といえよう。古河公方足利義氏は、小田原北条氏にとって関東を治めるためには無くてはならない存在であり、その義氏が在城する葛西城は当然のことながら御座所として重要な施設であったはずである。このような足利義氏や小田原北条氏の動向と小田原系手づくねかわらけの出土は無関係とは思われない。葛西城が考古資料的にも小田原と強い結びつきを見せるのは、古河公方足利義氏の存在なくしては説明がつかないのではないだろうか。

小田原系のかかわり以外の葛西城から出土した陶磁器類を見ると、国産の瀬戸・美濃焼や常滑焼の製品が多く出土しているが、15世紀後半から16世紀前半に比べ、量的に16世紀後半以降の製品が少なくなる傾向がある。また、南関東の小田原北条氏に属した諸城から出土する初山焼や志戸呂焼などの製品については、今のところ志戸呂と思われるものが1点確認されたのみで、皆無に等しい。中国製の磁器類は、先の青花器台のほかにも、青花、白磁、青磁などが出土しているが、万暦様式の製品が極めて少ない。

以上のように、小田原北条氏時代の葛西城から遺物がまんべんなく出土するのではなく、陶磁器類を例にとると、概して16世紀後半に国産、舶載とも遺物の出土が少ないのが特徴といえる。概ね天正期にはそれ以前に比べ生活の痕跡が薄くなるといえよう。つまり、遺物から見ると小田原北条氏時代の葛西城は、義氏御座時代と退去後では、その使われ方、役割が変わったかのように考えられる。長塚氏が指摘した葛西城が前線基地ではなく、中継・補給基地化したことが遺物量に反映しているものと判断されるのである。

おわりに

天文から永禄期の葛西城は、小田原北条氏にとっても下総進出の拠点の境目の城として重要な役割を担っていた時期であろう。なかでも古河公方足利義氏が在城していた天文末年から永禄元年までは、政治的にも脚光を浴びた時期であった。また、その時期は関東の諸勢力にとっても古河公方の御座所として葛西城が注視されていたはずである。葛西地域を取り巻く政治情勢の変化の中で、天正期には、葛西城は中継・補給基地へと変容する。この一連の葛西城の動向は、考古資料によってもうかがうことができる。

そして葛西城の軍事的役割の低下とともに葛西城から葛西新宿へと地域の要は移り、おそらく天正期以降、江戸領内の葛西地域を管轄する役所的な役割をも葛西新宿が担うようになるものと考えられる。

このようにしてみると葛西城は、軍事のための施設ということだけではなく、古河公方の御座所という極めて政治的な場として、また元服を執り行う儀礼³³⁾の場としても機能した。軍事面だけみても、最前線基地から兵站基地へとその役割が変わってきている。つまり、少なくとも小田原北条氏時代の葛西城をみていると、戦国城郭の多様な役割がうかがえるのである。

また、古河公方領国と葛西地域との関係においては、公方領国や古利根川・太日川水系の権益を維持するためにも葛西地域は重要な要地であり、現在の東京湾を臨む武蔵・相模・下総・上総の湾岸地域と内陸との交通を考えるうえでも極めて政治・経済的にも葛西地域は大きな鍵を握る地域であったといえよう。葛西城はその要であった。

古河公方に関する文献史学の研究は盛んに行われてきたが、考古学的な研究はようやく葛西城の発掘成果の検討によって一步を踏み出したばかりであり、古河公方が御座した城の発掘調査等の研究の進展が期待される。例えば、古河公方の御座所となった城のなかでも古河城、栗橋城、関宿城、そして葛西城は、旧利根川水系沿いに所在し、河川を縄張りに取り込んだ共通する構えをしており、「古河公方の城」という視点での城の占地や縄張りに注目した研究なども必要となろう。

葛西城においては、御座所としての格式を考えると、本丸などに庭園などの遺構の存在が考えられ、今後、庭園の痕跡も含め御座所としての体裁などについても発掘調査によって追究していく必要があるだろう。

なお、葛飾で行われたシンポジウムについては、現在記録集を刊行するべく作業を行っているところである。シンポジウムの詳細については、記録集を参照願いたい。

最後に、3館連携シンポジウムを通して貴重なご意見をいただくことができた。運営に携わった諸機関・担当者をはじめ、報告者、参加された各位に心より御礼を申し上げたい。

【註】

- 1) 入本英太郎『増補 葛飾区史』上巻、葛飾区、1985年、392-393頁
- 2) 「浅野長吉書状」(葛西神社文書)によれば、天正18年4月29日付で、飯塚村・猿俣村・小合村・金町村・柴俣村の五ヶ村について禁制を長吉が取次いだ旨が記されている。葛西の村々が禁制を求めるなか、なぜか葛西城は抵抗するのである。浅野長吉の進軍経路についてはの最近の研究としては戸谷穂高氏の「小田原合戦と葛西」(『関東戦乱一戦国を駆け抜けた葛西城』葛飾区郷土と天文の博物館、2007年、170-174頁)などがある。
- 3) 古泉弘「葛西城址出土の青花器台」(『貿易陶磁研究』第7号、貿易陶磁研究会、1984年)
- 4) 小野正敏『講談社選書メチエ108 戦国城下町と考古学』、講談社、1997年)103-109 頁
- 5) 服部実喜「第12章 土器・陶磁器の流通と消費」(『小田原市史』通史編 原始古代中世、小田原市、1998年)824-848頁
- 6) 佐藤博信「古河公方足利義氏論ノート一特に「葛西様」をめぐる一」(『日本歴史』第464号、吉川弘文館、2002年)20-33頁
- 7) 加藤晋平氏は「Ⅴ まとめ—若干の考察と遺跡保存のお願い」(『青戸・葛西城址調査報告Ⅱ』、葛西城址調査会、1974年)113-151頁で、Ⅳ区濠(堀)の構築時期を、北条氏に落城させられた天文7年の後、ないし永禄5年の後のいずれかを想定し、遺物の面から後者の可能性が強いとしている。
- 8) 拙稿「葛西築城とその終焉—葛西城から見た戦国期における葛西の動向—」(『葛西城発掘30周年記念論文集 中近世史研究と考古学』、岩田書院、2002年)129-156頁
- 9) 宇田川洋編『青戸・葛西城址Ⅱ区調査報告』、葛西城址調査会、1976年、8-14頁ほか
- 10) 戸宇田川洋編『青戸・葛西城址調査報告Ⅲ』、葛西城址調査会、1975年、13-23頁ほか
- 11) 古泉弘編『葛西城—葛西城址発掘調査報告』、葛西城址調査会、1983年、90-121、408-414頁
- 12) 黒田基樹「足利義氏と小田原北条氏」(『関東戦乱一戦国を駆け抜けた葛西城』、葛飾区郷土と天文の博物館、2007年)164・165頁
- 13) 古河公方と葛西城との関係をいまま少し整理してみると、義氏が葛西城に御座していた8年間のなかでも、晴氏・義氏の葛西入部の時期か、足利晴氏失脚後の弘治元年(1555)におこなわれた葛西城での元服式という、ふたつの画期が考えられよう。
- 14) 宇田川武久『歴史ライブラリー146 鉄砲と戦国合戦』、吉川弘文館、2002年、75・76頁
- 15) ただし、はじめから堀幅が20メートルにおよぶものが造られていたかどうかを考古学的に検証するのはなかなか容易ではない。ある遺構が縮小される場合は発掘調査でも確認しやすいが、拡張となると難しくなる。何度かに亘って広げられたという可能性も否定できないが、後で紹介するⅢ区第80・81号井戸が大規模な堀によって画された本丸の構えと対応して配置されていることから、少なくとも小田原北条氏の本丸の構えは足利晴氏・義氏親子の御座の段階で整っていたことは確かかなようだ。
- 16) 鈴木正貴「出土遺物からみた結物」(『桶と樽 脇役の日本史』、法政大学出版、2000年)18-47 頁
- 17) 前掲註4に同じ。
- 18) 亀井明德「コラム5 葛西城址出土の元青花器台について」(『関東戦乱一戦国を駆け抜けた葛西城』、葛飾区郷土と天文の博物館、2007年)70・71頁
- 19) 桐山秀穂「コラム3 蓮弁文様の茶臼」(『関東戦乱一戦国を駆け抜けた葛西城』、葛飾区郷土と天文の博物館、2007年)36・37頁
- 20) 前掲註5)に同じ。
- 21) 2007年9月8日(土)に葛飾区郷土と天文の博物館で行われた東国中世考古学研究会のかわらけの検討会において、第81号井戸から出土した小田原系手づくねかわらけの時期をⅡa期新段階でも古手の一群としてとらえ、天文末から永禄の初め頃に位置付けて報告をおこなった。小田原市教育委員会の佐々木健策氏から概ね時期的な賛同をいただいた。

- 22) 加藤晋平「葛西城没落の記」(『東京の文化財』第33号、東京都教育委員会、1987年) 1・2頁
- 23) 拙稿「中世葛西の要「葛西城」―築城から落城まで―」(『武蔵野』333号、武蔵野文化協会、2000年) 33-40頁
- 24) 黒田基樹「小田原北条氏と葛西城」(『葛西城とその周辺』、たけしま出版、2001年) 113-148頁
- 25) 前掲註24) に同じ。134頁
- 26) 「(永禄11年)北条家朱印状」遠山文書(『戦国遺文後北条氏編第2巻1088』、東京堂出版、1990年) 64・65頁
- 27) 「(天正10年)遠山直景傳馬手形寫」武州文書(『戦国遺文後北条氏編第3巻2337』、東京堂出版、1991年) 181頁
- 28) 長塚孝「Ⅲ. 中世後期の葛西城・葛西地域をめぐる政治状況」(『葛西城ⅩⅢ』第3分冊、葛飾区遺跡調査会、1989年) 20頁
- 29) 「(天正4年)北條氏照判物寫」下総舊事三(『戦国遺文後北条氏編第3巻1871』、東京堂出版、1991年) 34頁
- 30) 「(天正7年)北條家朱印状」遠山文書(『戦国遺文後北条氏編第3巻2052』、東京堂出版、1991年) 91・92頁
- 31) 「(天正5年)北條家朱印状」武州文書(『戦国遺文後北条氏編第3巻1934』、東京堂出版、1991年) 57頁ほか
- 32) 前掲註12) に同じ。164・165頁
- 33) 「義氏様御元服之次第」國學院大學図書館所蔵(『関東戦乱一戦国を駆け抜けた葛西城』、葛飾区郷土と天文の博物館、2007年) 96・97頁
- 34) 「(天文24年)近衛植家諸状」喜連川文書(『戦国遺文古河公方編808』、東京堂出版、2006年) 211・212頁
- 35) 「鎌倉公方御社參次第」國學院大學図書館所蔵(『関東戦乱一戦国を駆け抜けた葛西城』、葛飾区郷土と天文の博物館、2007年) 109頁
- 36) 木下 聡「鎌倉府と古河公方」(『関東戦乱一戦国を駆け抜けた葛西城』、葛飾区郷土と天文の博物館、2007年) 148頁
- 37) 特別展や江戸東京博物館でのシンポジウムでは江戸城の御座については取り上げなかったが、すでに平野明夫氏が「Ⅲ. 史料から見た竹橋地区」(『竹橋門 江戸城址北丸竹橋門地区発掘調査報告書』、東京国立近代美術館遺跡調査委員会、1991年) 355・356頁で指摘しているので付記しておきたい。
- 38) 佐脇栄智『小田原衆所領役帳 戦国遺文後北条氏別巻』、東京堂出版、1999年、169頁。葛西様御領として「三拾壹貫貳百六拾文 小机 長津田、百六拾五貫文 同 子安、百貳拾壹貫五百文 江戸 平塚、七拾七貫三百五拾文 品川南北、以上三百九拾五貫百拾文」と記されている。
- 39) 佐藤博信「武州品川における烏海氏の動向」(『江戸湾をめぐる中世』、思文閣出版、2000年) 208-216頁
- 40) 市村高男「中世東国における内海水運と品川湊」(『品川歴史館紀要』10号、品川区品川歴史館、1995年) 4-13頁
- 41) 佐藤博信『江戸湾をめぐる中世』、思文閣出版、2000年
- 42) 拙稿「収束」(特別展『下町・中世再発見』、葛飾区郷土と天文の博物館、1993年) 130・131頁、同「東京低地の中世遺跡」(『東京低地の中世を考える』、名著出版、1995年) 157-164頁ほか。
- 43) 長塚孝氏は、「鎌倉・室町期の葛西地域」(『東京低地の中世を考える』、名著出版、1995年) 103-106頁で、山田邦明氏は鎌倉府の直轄領が利根川水系を押さえる形で展開することを明らかにしたのを受けて、葛西が「広い意味で鎌倉府の直轄領」であることを指摘し、上流部の直轄領との関係から「袋の口」に例え葛西の重要性を述べている。
- 44) 湯浅治久氏は、「東京低地と江戸湾交通」(『東京低地の中世を考える』、名著出版、1995年)

- 183・184頁で、東京低地は「そこに流れ込む古利根川や江戸川により、二つの「内海（江戸内海と香取の海）」をつなぐ重要な地域」と論じている。
- 45) 市村高男氏は、「中世東国における房総の位置—地域構造論的視点からの概観—」（『千葉史学』第21号、千葉史学会、1992年）で、「下総の葛西は、武蔵の隅田・今津などと共に古利根川・太日川水系の内陸水路と内海の結節点として古くから発展」した地域ととらえ、「江戸海—古利根・太日川水系—関宿—下総川—鹿島香取海という大動脈」の存在を強調している。
- 46) 佐藤博信氏は、前掲註6において「葛西城は、まさに陸上交通・河川交通の交差する要衝の地に存在した」と述べている。
- 47) 品川湊との関わりや築田氏の存在、「（弘治4年）足利義氏条書」築田家文書（『戦国遺文古河公方編837、東京堂出版、2006年）219頁などに「利根川舟路并古河へ通商人船」「舟役」と記され、義氏が古河周辺の利根川筋の水上交通に深くかかわっていることが確認できる。註24）の「（天正4年）北條氏照判物寫」下総舊事三（『戦国遺文後北条氏編第3巻1871』、東京堂出版、1991年）34頁の文書では、氏照が栗橋・関宿城を抑え佐倉や葛西へ水上交通を掌握した様子がうかがえるが、古河は含まれていない。小田原北条氏が利根川筋を抑えるなかで、古河周辺はまだ義氏の管轄として残されていたためであろうか。
- 48) 前掲註28)に同じ。
- 49) 佐藤博信氏によって前掲註6)において、梶原政景が葛西城で弘治3年（1557）に元服していることが紹介されている（『年代記配合抄』）。

正誤表

該当箇所	誤	正
28 頁	ヒコサンヒメシヤラ (神奈川県立箱根湿生園提供)	ヒコサンヒメシヤラ (<u>箱根町立箱根湿生花園</u> 提供)